



鬱々たる思いを味わうことになる。

このころにアーベルは「楕円関数論」をまとめる。これをもって、パリ科学院にいたオーギュスタン・ルイ・コーシー（1789～1857）のもとを訪ねる。当時、コーシーは解析学の権威者だったのである。しかし、とても気難しい性格だったという。アーベルはコーシーのことを「コーシーは頭がおかしくて、どうしようもないやつだ。でも、今のところ数学をどうすればいいのかを知っている唯一の人物だ」と語っている。しかし、この論文もまた、評価されることは無かった。この論文は審査員が家へ待ち帰ったまま忘れられてしまったのである。

結果として、アーベルは、ガウスとコーシーという当時の偉大な数学者から無視されてしまった。

1827年の5月にアーベルはノルウェーに帰国する。遊学で体を酷使したため、肺結核にかかってしまい、体が日増しに衰弱していく。

1828年に陸軍士官学校及び大学の代理講師となる。そこで、再び、楕円関数論発表し、カール・ヤコビとの論争した。彼はアーベルの論文に接し「私の及ばざる所、賞賛するに辞無し」と感激を極めて言ったそう。